

「別海町別海地区の主要な湿原の調査および保全対象化」 事業の概略について

齋藤 央

一、事業背景

別海町は海岸部に二つのラムサール条約登録湿地(野付湾、風蓮湖)を擁する一方、内陸部の湿地は西別ヤチカンバ湿原以外は保全の対象になっておりません。町中心部の別海地区では市街地や牧草地に隣接して多数の湿原があり、その実態は明らかにされてきませんでした。

2021年、別海市街地に隣接する宮舞町湿原でムセンスゲ(環境省 RDB 絶滅危惧Ⅱ類)が自生していること、その自生地が埋め立てで消滅の危機に瀕していることが判明しました。

宮舞町湿原の植物相(ムセンスゲの存在を含む)があと1、2年早く知られていれば、この埋め立ては回避可能でした。斯様な事態を繰り返さないためには、たとえ暫定的かつ簡易でも別海地区の湿原の可及的速やかな調査と実態把握が必要不可欠であり、行政や研究機関の動きを待つ猶予は無いと考え、本事業の実施を思い立ちました。



図 1 宮舞町湿原のムセンスゲ

二、調査概要

空中写真の判読で、別海町別海地区で42か所・756ha(西別ヤチカンバ湿原を含む)の湿原を確認しました。そのうち、①未調査で②面積が大きく③環境の劣化の度合いが少ない湿原を優先的な調査対象としました。一部の湿原では他の研究者との合同調査が実現しました。

対象地区内での調査は2022年4月末から10月にかけて実施し、14か所の湿原を調査しました。加えて、別海町内の他地区の湿原2か所、標津町内の湿原2か所を、比較対象として調査しました。



図 2 兼金沼湿原での調査風景
(画像提供；水島未記氏)

三、調査結果

今回の調査によって、主要な湿原の植物の分類群数の暫定的な下限が明らかとなり、横断的な比較を可能にするという目的は十分に達成できたと自負しております。とりわけ、カンチスゲ(環境省 RDB 絶滅危惧 I B 類)が別海町内 10 か所、ムセンスゲが別海町内 7 か所・標津町内 2 か所で発見される



図3 栄川湿原の“カンチスゲ坊主”

など、調査対象の湿原が絶滅危惧植物の貴重な自生地であることが明らかとなりました。道東地域の自然保護や生物多様性維持を考えるに際して、これらの湿原が無視すべからざる存在であることを、今回の調査結果は示しています。

別海町内のムセンスゲ自生地は西別川流域に限定され、兼金沼湿原では国内最大規模(約 54ha)の自生地が見つかり、猿払川流域と並ぶ“ムセンスゲ王国”であることが判明しました。カンチスゲはムセンスゲよりも多くの湿原で見つかり、環境省 RDB 上のランクと局所的な分布状況が照応しない典型例となっています。



図4 別海町別海(西別南湿原以東)・本別海の希少スゲ類の分布状況。黄色い枠は 2022 年度調査地。タルミスゲ(B)・カンチスゲ(G)・イトナルコスゲ(X)・ムセンスゲ(L)・ホロムイクグ(T)。カンチスゲは絶滅危惧 I B 類、ほか 4 種は絶滅危惧 II 類。ムセンスゲだけが西別川流域に限定されていることがわかる

今回の調査対象地はほとんどが私有地で、大半は防霧保安林に指定されているものの、それ以外何ら法的な保護の対象となっていないことが、再確認されました。西別

川流域だけでも 1350ha 以上の湿原が開発で失われ、現在残っている湿原は元の半分以下であることを併せ考えると、現存する湿原を最大限保全するための枠組み構築が喫緊の課題であることが明らかとなりました。

四、各種フィードバック

日本湿地学会釧路大会の口頭発表(2022年9月)、「宮舞町湿原を大切に思う会」主催の講演会サブ企画(2022年10月)、「石狩川流域 湿地・水辺・海岸ネットワーク」主催しめっちフォーラムでのポスター発表(2023年2月)、北方山草会会誌『北方山草』(2023年3月)投稿、北海道自然保護協会会誌『北海道の自然』(2023年4月)寄稿で、各時点での知見を発表しました。2022年10月の講演の要旨は、読売新聞道



図5 日本湿地学会釧路大会での質疑応答
(画像提供; 鈴木玲氏)



図6 ムセンスゲの標本
(別海町郷土資料館所蔵)

内版や釧路新聞で報道されました。また、合同調査の結果は、北海道博物館「もっと! あっちこっち湿地」展(2023年2~5月)に反映されました。

今回の調査では植物標本75点を採取し、2021年採取分56点と併せて131点の標本を北海道大学総合博物館陸上植物標本庫に寄贈しました。そのうち、宮舞町湿原のムセンスゲの標本1点が別海町郷土資料館に寄贈され、宮舞町湿原を大切に思う会主催の写真展(2023年3月)で展示されました。

天候不順や調査時間の制約などの関係で写真集制作に堪える点数の画像素材が揃わず、残念ながら当初予定の小写真集の出版には到りませんでした。代

わりに80ページの報告書を作成し、環境省北海道地方環境事務所、北海道博物館、北海道大学総合博物館、釧路市立博物館などに寄贈しました。

2023年度以降、追加調査で知見を積み重ねつつ、機会を逃さず情報発信や知見のフィードバックを実行に移し、今回調査した湿原が1か所でも多く保全対象となるよう努力していきたいと考えます。

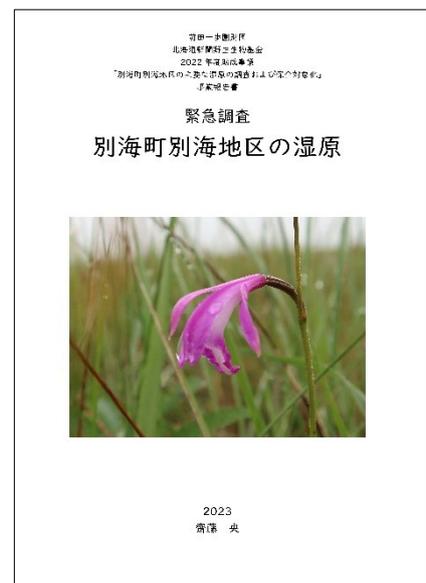


図7 報告書の書影